地域研究　第19巻　第1号　1978年6月

人口移動と地域的基盤との関係性(1)

——木曾福島北部河谷集落の場合——

松井秀郎*

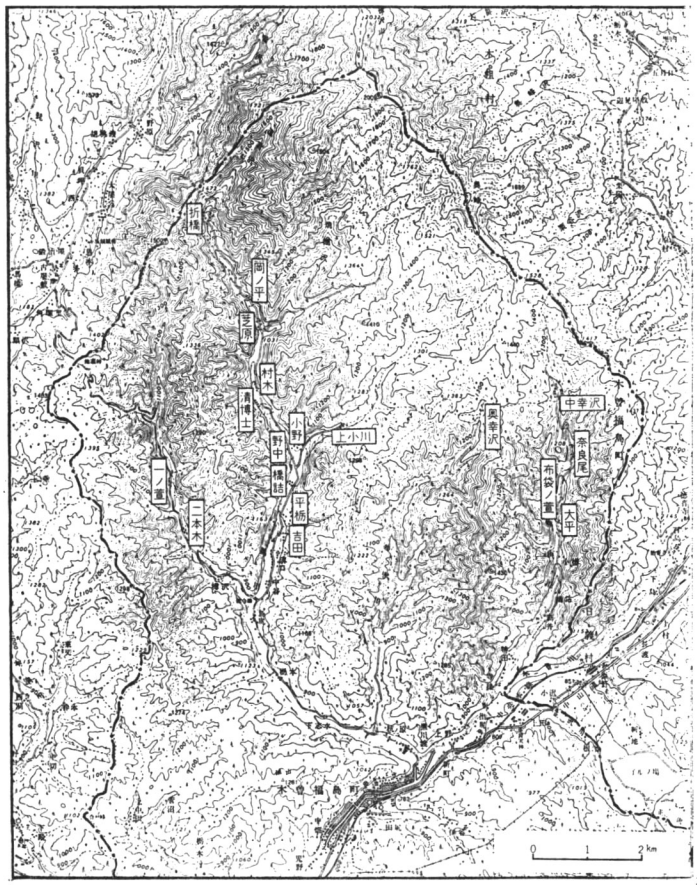
I　はしがき

人口移動は，人間を押し出す地域と引きつける地域の関係で生ずる現象である．本研究の目的は，人間を押し出している地域について，その人口移動と地域的基盤の関係性を追究することにあるが，本報告ではまず人口移動と地域的基盤をそれぞれ類型化して，その地域的な対応関係で地域区分しようと試みたものである．

人口移動はその集団性，地域，期間，目的などからいろいろな形態に分けられるが，本研究では主に単独で永久的な職業移動をとりあげた．また，地域的基盤を表わす指標としては，地形的要素や，生産活動を反映する収入源などをとりあげた．本報告は，上記の研究目的に関する中間報告である．

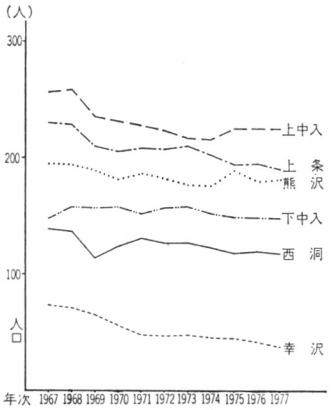
研究地域は木曾福島北部の 18 の河谷集落とした．その理由は，地域的基盤が明瞭に出るのはこうした山地の集落ではないかと考えたこと，木曾福島というはっきりした中心地があること，木曾福島の人口吸引力があまり強大でないことなどである（第1図）．

研究方法は，現地における集落調査と聴き取り調査，郵送法によるアンケート調査[1]を実施し，そ



「この地図は，国土地理院発行の5万分1の地形図(木曾福島・伊那)を使用したものである。」

第1図　調査集落とその周辺の地形



第2図　木曾福島北部地域における人口変動

木曾福島町役場資料より作成

*　立正大学大学院

れらをまとめた．集落調査では集落内の見取図を作成し，立地場所・土地利用・産業などについて調査した．また，転出者・新規の居住者・Uターンの有無について聴き取りを行なった．アンケート調査用紙は，研究地域の全世帯に郵送し，その回収率は63.1%であった．

II　人口移動の変化と現状

人口移動を明らかにするに際して，まず最近10年間の人口変動を概観する（第2図）．

1967年の人口を100とする指数で1977年の人口をみると，木曾福島町全体では87.9，調査地域全体では86.5，上条地区（折橋・岡ノ平・芝原・村木・清博士）では82.6，上中入地区（上小川・野中・小野・橋詰）では87.9，下中入地区（平栃・吉田）では100.0，西洞地区（一ノ萱・二本木）では84.9，幸沢地区（奥幸沢・中幸沢）では52.0，熊沢地区（奈良尾・布袋ノ萱・大平）では92.8であった．このことから調査地域は木曾福島全体より人口減少傾向が強く，地区別では幸沢・上条・西洞が調査地域の中でも更に減少傾向が強いと言える．谷筋ごとに見れば，黒川では上流から上条82.6，上中入87.9，下中入100.0と連なり，熊沢川では幸沢52.0，熊沢92.8となって下流部[2]ほど減少傾向が弱く安定していることがわかる．同様に木曾福島の周辺地域[3]のなかで位置づけた場合も，上条・上中入・西洞・幸沢は減少傾向が強く，下流部の下中入・熊沢では弱い．

世帯数の変動は，各地区ともに若干の減少傾向にあるが，さほど大きな変化はない．

明治時代初期までの人口の動きを推察するために，各集落の苗字の分布状態をみてみる（第1表）．

各集落の苗字の多様性・特殊性を表わすために相対エントロピー[4]を用いた．その結果，芝原・橋詰・吉田・上小川・奥幸沢・中幸沢では比較的値が大

第1表　木曾福島北部河谷

苗字 / 集落名	大橋	志水	中島	芝田	中畑	古田	清水	木村	勝山	古瀬	野口	上田	奥田	田中	野村	保科	島崎	森田	伊藤	田口	今井	丸田	木村	森口
折橋	9																							
岡ノ平		6	5																					
芝原				4	2	6																		
村木								4	1	1														
清博士							4																	
上小川				2								6	3											
野中											9													
小野														3	7	1								
橋詰							1										1	3	1	1	1	2	1	4
平栃																								
吉田														3										
一ノ萱																								
二本木																								
奥幸沢																								
中幸沢																								
奈良尾																								
布袋ノ萱																								
大平																								
計	9	6	5	6	2	6	5	4	1	1	9	6	3	6	7	1	1	3	1	1	1	2	1	4

きくなり，苗字の多様性が大きいことがわかる．これに対して，折橋・清博士は完全に特殊化しており，集落の全世帯が同じ苗字となっている．芝原・橋詰は川の合流地域であり，谷間の農業地域としての有利性や交通路の接点としての便利性から，いろんな人が流入したためと考えられる．上小川・奥幸沢・中幸沢は木祖村から開田村へ抜ける古くからの道筋にあたることや，中幸沢がかつては盛んだった馬の生産地ということが原因となって，人が流入して苗字が多様化したと思われる．黒川沿いの集落では相対的に上流部より下流部の方が耕地面積が広いために，人口の数も多く，他地域からの流入も多かったと考えられる．折橋・清博士は，集落そのものが山腹斜面・谷底平地の狭い場所に立地しているため，人の流入が少なく特殊化しているのであろう．調査地域の苗字は，たいていその集落独自のもので共通するものは少ないが，芝田・清水・田中という苗字は黒川の谷筋方向に共通の集落があり，奥原・茂木という苗字は交流が強かった奥幸沢と中幸沢に共通であるなど，人の移動と苗字の分布には関連があると考えられる．芝原・橋詰・中幸沢などの多様性の大きい集落には神社があり，周辺の集落の中心になっている．

現在時点の人口移動を転出者[5]でみると，調査地域全体での転出先は，愛知県 41.8%，長野県内 32.7%，東京都 12.7%，岐阜県 10.9% となり，この1都3県で 98.1% を占めている．そして，愛知県の中でもその 69.6% が名古屋市への転出であり，中京圏とその中核都市名古屋との結びつきが強いことがわかる（第2表）．

転出先の集中・分散の状態を相対エントロピーでみると，折橋・岡ノ平・芝原・清博士・上小川・平栃・大平は転出先がある地域へ集中する傾向がみられ，小野・橋詰・一ノ萱では分散する傾向がみられ

集落における苗字　　（単位　軒）（現地調査資料より作成）

橋渡	尾崎	芝原	森下	田下	片原	戸田	古野	鈴木	奥谷	和田	高坪	奥原	竹原	吉江	茂木	青木	奈良尾	山田	伊原	黒畑	計	相対エントロピー R·H
																					9	0
																					11	0.1810
																					12	0.2658
																					6	0.2280
																					4	0
																					11	0.2615
																1					10	0.0854
																					11	0.2260
5	1																				21	0.5725
		4	1	1																	6	0.2280
					1	2															6	0.2658
							3	2													5	0.1768
									2	3											5	0.1768
												1			1	3					5	0.2496
											1	3	2	1	1						8	0.3925
																	1	1			2	0.1821
																			2		2	0
																				3	3	0
5	1	4	1	1	1	2	3	2	2	3	1	4	2	1	2	4	1	1	2	3	137	

第2表　木曾福島河谷集落における転出先の分布　　転出先＝集落を100とする

集落名＼鉄道距離＼転出先	木曾福島	上松	中津川	松本	辰野	岡谷	安曇追分	伊奈	諏訪	土岐	春日井	長野	犬山	各務原	名古屋	甲府
	—	8	53	56	60	69	76	77	78	97	115	119	125	129	133	146
折橋	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	60.0	—
岡ノ平	25.0	—	—	—	—	—	—	—	25.0	—	—	—	—	—	50.0	—
芝原	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	25.0	—	—	—	25.0	—
村木	100	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
清博士	—	—	—	50.0	—	—	—	—	—	—	—	—	50.0	—	—	—
上小川	14.3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	14.3	42.8	—
野中	—	—	—	16.7	—	—	—	—	—	—	—	—	16.7	—	33.2	—
小野	14.3	14.3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	28.5	14.3
橋詰	10.0	—	—	—	—	10.0	—	—	10.0	—	10.0	10.0	10.0	—	10.0	—
平栃	—	—	—	—	—	—	33.3	—	—	—	—	—	—	—	33.3	—
吉田	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
一ノ萱	16.7	—	—	16.7	—	—	—	16.7	—	—	16.7	—	—	—	16.7	—
二本木	—	—	—	—	100	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
奥幸沢																
中幸沢																
奈良尾	100	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
布袋ノ萱																
大平	—	—	—	—	—	—	—	—	—	33.3	—	—	—	—	—	—

* 聴き取り調査によって，転出者がいないことを確認した．

る．野中は集中・分散のほぼ中間に位置する．また，村木・吉田・二本木・奈良尾では転出者が1名であり，奥幸沢・中幸沢・布袋の萱には転出者がいない．

次に，その転出先を大都市とその他の地方都市に分けて調べてみる．名古屋・東京・横浜など，大都市への転出率が高い集落は，折橋 100%，岡ノ平 50.0%，芝原 50.0%，野中 66.7%となっている．その反対に地方都市への転出率が高い集落は，清博士100%，小野 71.4%，橋詰 60.0%，平栃 66.7%，大平 100% となっている．

転出先の集中・分散と，大都市への転出・地方都市への転出を組み合せて考察すると，折橋・岡ノ平・芝原・上小川は集中傾向が強く大都市への転出が多い集落となり，小野・橋詰・一ノ萱は分散傾向が強く地方都市への転出が多い集落となる．この移動のタイプについては第 IV 章でまとめる．

人口移動のなかでも流入してきた者を調べると，いわゆる人口Uターンは，黒川中流部の小野と熊沢川下流部の大平にみられ，それぞれ1名が大阪と東京から元の世帯に転入している．大平の場合は，25歳の男子が東京の工場勤務から地元交通会社のバス運転手になった例であるが，地元就職口の少ない木曾福島では稀な事例であろう．

上記の転出者・転入者のような単独移動ではなく，家族ぐるみで移動したものを調べると，挙家離村をした世帯は奥幸沢に4軒，二本木に1軒ある．奥幸沢の4軒の内1軒は岐阜県への移動であるが，残り3軒は木曾福島市街地への移動である．二本木の1軒も下流の集落への移動であり，調査地域での家族移動は地方的移動[6]が主であると言えよう．

将来の移転についての住民の意識は，調査地域全

百分率　　鉄道距離＝単位(km)（アンケート調査資料より作成）

豊田	関ケ原	浜松	前橋	熱海	東京	金沢	横浜	相対エントロピー R・H
188	191	242	258	276	280	300	308	
—	—	—	—	—	20.0	—	20.0	0.2496
—	—	—	—	—	—	—	—	0.2002
—	—	—	25.0	—	25.0	—	—	0.4362
—	—	—	—	—	—	—	—	0
—	—	—	—	—	—	—	—	0.2181
—	—	—	—	—	14.3	14.3	—	0.4643
—	—	—	—	—	16.7	—	16.7	0.4914
14.3	14.3	—	—	—	—	—	—	0.5502
—	—	—	—	—	30.0	—	—	0.6208
—	—	—	—	33.3	—	—	—	0.3457
—	—	100	—	—	—	—	—	0
—	—	16.7	—	—	—	—	—	0.5643
—	—	—	—	—	—	—	—	0
								転出者なし*
								転出者なし
—	—	—	—	—	—	—	—	0
								転出者なし*
—	66.7	—	—	—	—	—	—	0.2002

体では 70.5% の世帯がこれからも移転することはないだろうと答えている．特に，村木・清博士・上小川・平栃では，100% が移転することはないだろうと答えている．これに対して，折橋・岡ノ平・芝原・一ノ萱・中幸沢・奈良尾では，いずれ移転するかも知れないと答えた世帯が比較的多く，小野・一ノ萱では，移転計画を持つ世帯がある．このことから，上流部の集落の方が移転したいという意識はより強いが，具体的な計画を持つ世帯は中流部に多いと言える(第3表)．

III　地域的基礎の特性

調査集落は，標高約900m～1,300m の間に位置しており，その場所は大部分が谷底平地であるが，上流部では山腹斜面・谷底斜面，下流部では段丘上に立地するものもある（第4表）．

集落の立地している場所の谷幅を，広い・狭い・中間に分けてみると，黒川では折橋と岡ノ平，清博士と野中，上小川と小野，一ノ萱と二本木，熊沢川では奈良尾と布袋ノ萱の間で変換点がある．この谷幅の違いは，集落の農業に大きな影響を与えている．

集落周辺の土地利用を見ると，水田はほとんどの集落にあるが，折橋にはない．これは標高が高く，急傾斜の山腹に立地しているためであろう．畑は全集落にみられ，岡ノ平ではソバの栽培がみられた．このことは，岡ノ平ぐらいの標高 1,100m 付近からはかなり気温が低い地域になることの証左であろう．桑は，上流部・中流部に多く見られるが，養蚕をやめたために手入れをして

第3表　移転に対する住民意識　　（集落全体の回答数に対する百分率．アンケート調査資料より作成）

選択肢＼集落名	折橋	岡ノ平	芝原	村木	清博士	上小川	野中	小野	橋詰	平栃	吉田	一ノ萱	二本木	奥幸沢	中幸沢	奈良尾	布袋ノ萱	大平
																		(%)
これからも移転することはないだろう	60.0	42.8	57.1	100	100	100	83.3	62.5	85.8	100	75.0	40.0	75.0		42.9	50.0		66.7
現在移転する計画をもっている	—	—	—	—	—	—	—	12.5	—	—	—	20.0	—		—	—		—
いずれ移転するかも知れない	20.0	28.6	28.6	—	—	—	—	12.5	7.1	—	—	20.0	—		42.9	50.0		—
わからない	20.0	28.6	14.3	—	—	—	16.7	12.5	7.1	—	25.0	20.0	25.0		14.2	—		33.3

第4表　木曾福島北部河谷集落における地域的基盤　（現地調査資料により作成）

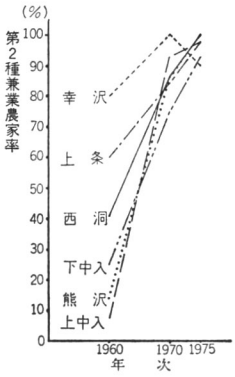
集落名	標高（m）	谷幅*	立地場所	集落付近の土地利用	稲作以外の産業	道路距離**（km）	時間距離**（分）	自動車普及率（%）	オートバイ普及率（%）	バス運行回数（回）
折橋	1,280	狭い	山腹斜面	畑	——	14.3	60	66	66	1
岡ノ平	1,100	中間	谷底斜面	水田・畑・桑・ソバ	木炭・養蚕	12.5	50	81	63	3
芝原	1,060	中間	谷底平地	水田・畑・桑	養蚕	12.0	45	92	25	5
村木	1,000	中間	谷底平地	水田・畑・桑	木炭・養蚕・椎茸	11.1	38	100	50	5
清博士	980	中間	谷底平地	水田・畑・桑	椎茸	10.6	35	75	25	5
上小川	1,000	中間	谷底平地	水田・畑・桑	川魚養殖	10.3	35	72	72	—
野中	960	広い	谷底平地	水田・畑・桑	——	9.8	30	90	30	5
小野	960	広い	谷底平地	水田・畑・桑	——	9.8	30	72	54	5
橋詰	940	広い	谷底平地	水田・畑・桑	木炭・川魚養殖	9.5	25	61	57	5
平栃	920	広い	段丘	水田・畑	畜産	8.3	20	100	50	5
吉田	880	広い	段丘	水田・畑	畜産	8.1	18	66	33	5
一ノ萱	980	狭い	谷底平地	水田・畑	——	9.8	25	57	42	6
二本木	940	中間	段丘	水田・畑	——	9.0	20	80	40	6
奥幸沢	1,240	狭い	山腹斜面	水田・畑・桑	畜産	11.3	50	0	80	—
中幸沢	1,260	狭い	山腹斜面	水田・畑・桑	畜産	9.8	40	70	20	—
奈良尾	1,040	狭い	山腹斜面	水田・畑・桑	川魚養殖	8.8	23	50	100	—
布袋ノ萱	1,000	広い	谷底平地	水田・畑・桑・飼料作物	養蚕・畜産	7.8	20	100	100	1
大平	980	広い	谷底平地	水田・畑・桑・牧草・飼料作物	養蚕・畜産	7.3	15	100	—	1

* 現地調査で目測したものを三階級に区分
** 木曾福島市街地からの道路距離・時間距離（自動車による）

第5表　自営兼業率・雇用兼業率の変化　1960～1975

地区名＼年次	自営兼業率（%） 1960	1970	1975	雇用兼業率（%） 1960	1970	1975
上条地区	70.0	2.6	0.0	30.0	97.4	100.0
上中入地区	71.4	4.9	0.0	28.6	95.1	100.0
下中入地区	32.1	11.1	10.7	67.9	88.9	89.3
西洞地区	9.1	0.0	18.2	90.9	100.0	81.8
幸沢地区	73.3	14.3	20.0	26.7	85.7	80.0
熊沢地区	27.6	3.4	10.3	72.4	96.6	89.7

（農業集落カードより作成）



第3図　第2種兼業農家率の変化
農業集落カードより作成

いない集落もある．熊沢川下流部の布袋ノ萱・大平では飼料作物や牧草の栽培もみられる．

このような農業生産をしている農家について，調査集落を6つの地区（上条地区・上中入地区・下中入地区・西洞地区・幸沢地区・熊沢地区）に分けて概観する．

地区全体では，1975年の農家率は 80.8% であるが，これを地区別にみると，上条 88.6% 上中入 75.9%，下中入 84.8%，西洞 66.7%，幸沢 93.3%，熊沢 82.9%となり概して上流部ほど農家率は高い．しかし，農産物の販売がない農家をみると，上条 68.4%，上中入 43.9%，下中入 17.9%，西洞 54.5%，幸沢 90.0%，熊沢 37.9%となって，農家率は高くても上流部ほど自給的色彩が強く，なかでも幸沢がその典型的な地区と言える．

また，農家を専業・兼業の面からみると，地区全体の 99.2% が兼業農家[7]である．この兼業農家を，第1種兼業と第2種兼業のどちらが多いかでみると，上条・幸沢の谷奥の地区では，1960年にはすでに第2種兼業が多かったのに対し，上中入・下中入・西洞・熊沢の中流部・下流部の4地区は，1960年では第1種兼業農家が多くなっている．さらに，兼業を自営兼業・雇用兼業に分けてみると，下中入・西洞・熊沢の下流部の地区では，1960年・1970年・1975年共に雇用兼業が多かったのに対して，上条・上中入・幸沢の上流部・中流部の地区では，1960年は自営兼業の方が多くなっている．言いかえれば，1960年～1970年にかけて上流部では自営兼業から雇用兼業への転換，中流部・下流部では第1種兼業から第2種兼業への転換が起り，現在は全地区が第2種兼業・雇用兼業の多い地域になっていると言える．これは，自動車を使えば，木曾福島市街地から最も遠い折橋からも1時間で来ることができるようになったことや，その自動車の普及率がほとんどの集落で 70%を越えるほど高くなってきたためと考えられる（第3図・第5表）．

このような河谷集落では1戸当りの水田面積も，上条 13a，上中入 36a，下中入 43a，西洞 34a，幸沢 26a，熊沢 45aと少ないため，稲以外の生産にも力を入れている．木炭は，岡ノ平・村木・橋詰など黒川沿いの集落で生産され，これらの集落は上流部に位置する．養蚕は岡ノ平・芝原・村木・布袋ノ萱

第6表　木曾福島北部河谷集落における収入源　（アンケート調査資料により作成）

収入源＼集落名		折橋	岡ノ平	芝原	村木	清博士	上小川	野中	小野	橋詰	平栃	吉田	一ノ萱	二本木	奥幸沢	中幸沢	奈良尾	布袋萱	大平
第1位の収入	農業所得	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		16.7	—		100
	事業所得(自営業)	20.0	—	—	—	33.3	—	—	12.5	14.3	33.3	—	20.0	—		16.7	100		—
	奉給(会社勤務)	80.0	85.7	100	100	66.7	100	100	65.5	78.6	66.7	66.7	60.0	75.0		50.0	—		—
	賃金(出稼・日雇)	—	14.3	—	—	—	—	—	12.5	7.1	—	—	—	25.0		16.7	—		—
	恩給・年金	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	33.3	—	—		—	—		—
第2位の収入	農業所得	—	—	33.3	100	66.7	33.3	75.0	33.3	55.6	33.3	100	—	66.7		100	—		—
	事業所得(自営業)	—	20.0	—	—	—	—	25.0	—	—	—	—	25.0	—		—	—		—
	奉給(会社勤務)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	25.0	—		—	—		100
	賃金(出稼・日雇)	66.7	60.0	66.7	—	33.3	66.7	—	33.3	22.2	66.7	—	50.0	33.3		—	100		—
	恩給・年金	33.3	20.0	—	—	—	—	—	33.3	22.2	—	—	—	—		—	—		—

パーセンテージは，それぞれの集落の全戸数に対するものである．

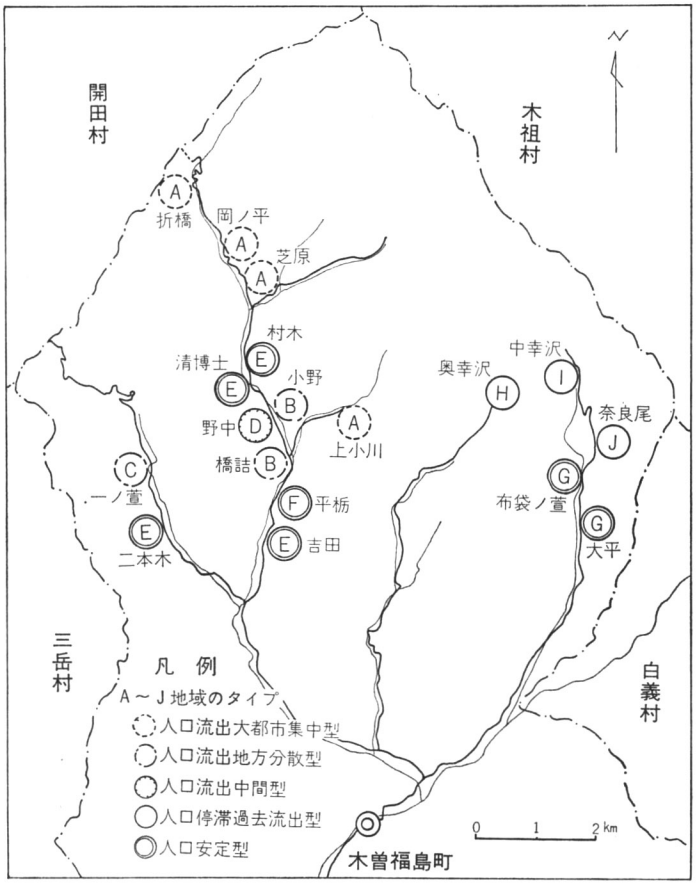
・大平で行なわれ，黒川では上流部，熊沢川では下流部の集落に多い．畜産は平栃・吉田・布袋ノ萱・大平などの下流部と，奥幸沢・中幸沢の上流部にみられる．これには，下流部では肉牛生産，上流部では牛の繁殖というところに違いがある．その他，村木・清博士では椎茸栽培，上小川・橋詰・奈良尾では川魚養殖が行なわれている．このような生産物の違いは農家の現金収入の差を生み出し，それが人口流出の地域的差異に大きく関係している．

次に世帯の収入源[8]から各集落を位置づける（第6表）．

各集落とも会社勤務による収入が第1位の世帯が多いが，こうした勤務先はほとんど木曽福島で，楽器製造・製材業・建築業などの木に関係した業種が多い．また公務員が多いのは，こうした地域の共通性であろう．熊沢川沿いの集落では，第1位の収入源がそれぞれ違っている．中幸沢では会社勤務による収入が第1位の世帯が多い，しかし他の収入源が第1位の世帯もかなりあって多様性がみられる．これは若年労働層が流出してしまって，残された高齢者が多様な職業に就くためと考えられる．奈良尾では，川魚養殖や木曽福島での自営業など，農業以外の事業所得が第1位の世帯が多い．大平では，肉牛生産等のための農業の現金所得が第1位の世帯が多い．

世帯の第2位の収入源からみると，黒川では折橋・岡ノ平・芝原・上小川・一ノ萱・平栃は，出稼・日雇による収入が多い集落であり，村木・清博士・野中・吉田・二本木は農業の現金収入が多い集落である．出稼・日雇による収入が多い集落は，上流部や支流の一番奥の集落で，標高も高く，谷幅も狭い地域に多く見られる．ただし，平栃は出稼よりも日雇が多い地域で上記の条件にあてはまらない．農業の現金収入が多い集落は，椎茸栽培や畜産などの産業があったり，中流部・下流部の谷幅の比較的広い地域に多く見られる．小野・橋詰は，谷幅も広く，谷の合流地域で低次の中心地となっており，世帯によって収入源が多様化して集落としての同一性は見られない．また熊沢川では，中幸沢は農業の現金収入，奈良尾は出稼・日雇のうち日雇の収入，大平は会社勤務による収入が第2位の世帯が多い集落となっている．

上記の地域的基盤を，各集落で卓越する収入源を中心にタイプ分けすると，①会社勤務＋出稼型



第4図　木曽福島北部河谷集落における地域区分

(折橋・岡ノ平・芝原・上小川)，②会社勤務＋日雇型（平栃・一ノ萱)，③会社勤務＋農業型（村木・清博士・野中・吉田・二本木)，④会社勤務＋多様型（小野・橋詰・中幸沢)，⑤自営業＋日雇型（奈良尾)，⑥農業＋会社勤務型（布袋ノ萱・大平)，⑦自給農業型（奥幸沢）となる．

IV　人口移動と地域的基盤による地域区分

第Ⅱ章で述べた人口移動の現状をまとめると，次の5つのタイプが考えられる．

(1)人口流出大都市集中型(折橋・岡ノ平・芝原・上小川)：転出者が東京・横浜・名古屋などの大都市に集中しているタイプ．(2) 人口流出地方分散型(小野・橋詰・一ノ萱)：転出者が近距離から中距離の地方都市に分散しているタイプ．(3) 人口流出中間型(野中)：転出先が集中と分散の中間に位置するタイプ．(4)人口安定型（村木・清博士・平栃・吉田・二本木・布袋ノ萱・大平)：転出者があまりないタイプ．(5) 人口停滞過去流出型（奥幸沢・中幸沢・奈良尾)：若者労働力は既に流出して老人が多く，転出者がいないタイプ．

これらの人口移動のタイプと，前章で述べた地域的基盤のタイプの関係を考察すると，大きくわけて次の2つのことが言えそうである．

1つは，農業の現金収入が世帯の第1位・第2位の収入源になっている集落は人口安定型になっていること．もう1つは，出稼による収入が多い集落は人口流出大都市集中型になっていることである．しかし例外もある．野中は農業収入が多いが，人口流出中間型になっている．これは野中が，会社勤務＋農業型と会社勤務＋多様型の地域の境に位置し，漸移地帯のような性格を持っているためと思われる．また，平栃は会社勤務＋日雇型であるが人口安定型になっている．

人口流出地方分散型の集落は，会社勤務＋多様型の地域と対応している．しかし一ノ萱は会社勤務＋日雇型であるが，人口流出地方分散型となっている．

以上述べてきた人口移動のタイプと地域的基盤のタイプから，調査地域は10の地域に区分できる（第4図)．

A型は，人口流出大都市集中型で会社勤務＋出稼型の集落（折橋・岡ノ平・芝原・上小川)．B型は，人口流出地方分散型で会社勤務＋多様型の集落（小野・橋詰)．C型は，人口流出地方分散型で会社勤務＋日雇型の集落（一ノ萱)．D型は，人口流出中間型で会社勤務＋農業型の集落（野中)．E型は，人口安定型で会社勤務＋農業型の集落（村木・清博士・吉田・二本木)．F型は，人口安定型で会社勤務＋日雇型の集落（平栃)．G型は，人口安定型で農業＋会社勤務の集落（布袋ノ萱・大平)．H型は，人口停滞過去流出型で自給農業型の集落（奥幸沢)．I型は，人口停滞過去流出型で会社勤務＋多様型の集落（中幸沢)．J型は，人口停滞過去流出型で自営業＋日雇型の集落（奈良尾)．

V　むすび

木曾福島北部河谷集落を例にとって，人口移動と地域的基盤の地域的な対応関係を追究してきたが，その結果を要約すると次のようである．

1. 木曾福島北部河谷集落の人口移動は，5つのタイプに類型化できた．
2. 木曾福島北部河谷集落の地域的基盤は，6つのタイプに類型化できた．
3. 木曾福島北部河谷集落は，人口移動と地域的基盤の対応関係から，10の地域に区分できた．

以上のように，人口移動と地域的基盤の対応関係から，木曾福島北部河谷集落を10の地域に区分したが，今後は，更に綿密な調査資料を補って，人口移動と地域的基盤との関係性を地域構造の中に位置づけながら研究していきたい．

末筆ながら，調査に協力して下さった木曾福島町役場ならびに住民の皆様に，深く感謝の意を表する次第です．

注

1) アンケート調査は1977年8月に実施した．なお，奥幸沢と布袋ノ萱はアンケート用紙を回収できなかった．
2) 研究地域の内部で，相対的に上流部・中流部・下流部の位置づけをした．
3) 1965年・1975年の国勢調査資料を用い，木曾福島町の人口集中地区の人口を差し引いて，周辺地域の人口とした．
4) 稲永幸男(1974)：山形県における小売業の地域事象論的考察．立正大学文学部論叢，48 号 p. 6
5) アンケート調査により，住民の家族で転出した者を調べた．
6) 岸本実(1971)：『人口地理学』p. 88，大明堂において，同じ町内または村内で移動した場合など，「せまい範囲の移動は普通，地方的移動といい，いわゆる国内移動 local movment とは別に考えるのが通例」と述べている．
7) 青野壽郎・尾留川正平編(1972)：『日本地誌第11巻　長野県・山梨県・静岡県』　二宮書店，p. 217 において，「木曾福島全農家の95%が兼業農家で，しかも第2種兼業が全体の 70%を占めている」．と述べている．
8) アンケート調査によって，世帯の収入源を調べた．

参考文献

1. 岸本実(1971)：『人口地理学』　大明堂，p. 87～91.
2. 館　稔編(1961)：『日本の人口移動』　古今書院，p. 15～34, p. 178～187.
3. 上野福男・高校地理研究会共著(1969)：『御岳・乗鞍周辺の地理』　二宮書店，p. 2～18，p. 74～77.
4. 飯山敏春・千葉徳爾・野間三郎・古川文次共著(1962)：『日本地誌ゼミナールⅣ　北信越地方』　大明堂，p. 221～233.
5. 多田文男・石田竜次郎編(1956)：『現代地理講座2　山地の地理』　河出書房，p. 190～192, p. 250～257.
6. 青野壽郎・尾留川正平編(1972)：『日本地誌第11巻　長野県・山梨県・静岡県』　二宮書店，p. 212～219.

(1978 年3月4日受理)